

# 聞十方

第8号

教区教化テーマ

## 創造と回復

温もりのある

お寺をともに



発行日 2021年6月1日  
発行者 山陽教区教化委員長 中根慶滋  
発行所 姫路市地内町1番地  
編集 広報・情報発信部門

戦火により焼失した広島別院 明信院

## ～戦後75年を過ぎて～ 広島から教区へ

戦後75年が経過しました。原爆投下は人間が人間に対して行ったことです。戦争は多くの命を奪い、生き残った人にも理不尽な苦しみを与え続けたのではないのでしょうか。今回の聞十方は、現在の語り部として多くの方々に戦争の原爆の恐ろしさを伝えて下さっている諏訪氏とご家族が原爆の犠牲となられた吉川氏に非核非戦の願いと思いをテーマに寄稿していただきました。

上記の写真の広島別院は原爆投下で焼失しました。しかし仏法を守りたいという広島の方々の思いは戦後の困難の中、僅か6年で本堂再建を成されました。そのような歴史を持つ建物も老朽化にともない新しい形となり、広島の間法道場として非核非戦の願いを発信する場として先人の志を引き継いでいます。

戦後75年経過し被爆経験された方が少なくなる中、今、改めて被爆体験や戦争体験を次世代の人々と共有し、非核非戦の道の歩み、さらにその思いが広がるよう力を尽さねばなりません。  
広報部部長 松江 長親



≪旧広島別院と被爆灯籠

⇒現在の広島別院と

引き継がれる被爆灯籠  
(二〇一四年再建)





# ～戦後75年を過ぎて～

## これまでのあゆみ

1982年3月2日

広島別院にて初回・決起する

### 表 白

私たちは「ヒロシマ」を忘れていたわけではありませんが、三十七年前のあの惨劇、そして今なお続いている被爆者の苦しみ、そこから湧き上がっている平和への血の叫び、そのヒロシマの心を念仏者として主体的に受けとめることに充分でなかったことは全く慙愧にたえません。

今日世界の情勢が核を中心とした軍備の増強によって不気味な恐怖をもたらしているとき、ささやかながら非核非戦の集いを持ちましたことは、私たち真宗門徒としての反省と自覚を新たにする歩みの第一歩であります。

非核非戦とは私たちがこのヒロシマの苦悩を共にすることによって、如来の悲願を聞きひらき、敵をも愛す同朋精神に生きることにあります。

私たちは先ず私たちの属する真宗大谷派教団が、教団として非核非戦への運動に立ち上がることを要求すると同時に、山陽教区人として人類の課題としてヒロシマにこだわりつづけることを誓い集会の宣言といたします。

1985年7月26日

被爆四十周年真宗大谷派非核非戦法要  
平和記念公園供養塔前にて  
記念講演 森滝 市郎氏・菱木 政晴氏

1994年8月6日

被爆五十回忌法要  
広島別院・平和記念公園供養塔前にて  
記念講演 長野 崇氏

1995年8月5日

被爆五十周年真宗大谷派非核非戦法要  
満景寺にて  
記念講演 寺川 俊昭氏

2005年8月6日

被爆六十周年真宗大谷派非核非戦法要  
広島別院・エソール広島・平和記念公園供養塔前にて  
記念講演 尾畑 文正氏

2011年4月16日

山陽教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌讃仰事業  
真宗本廟 御影堂・視聴覚ホールにて  
記念講演 姜 尚中氏

2015年8月6日

被爆七十周年非核非戦法要  
広島別院にて  
記念講演 升岡 博氏・諏訪 義円氏・長坂 公一氏

2015年10月3日

被爆七十周年非核非戦の集い  
姫路船場別院本徳寺にて  
記念講演 長田 浩昭氏  
記念コンサート ちひろさん（被爆ピアノによる演奏あり）

## 広島別院非核非戦法要歴代講師一覧

 栗原貞子氏

 真継伸彦氏

 河村盛明氏

 高橋昭博氏

 児玉暁洋氏

 ルーベン・L・F・アビト氏

 竹中智秀氏

 沼田鈴子氏

 澁谷昌氏

 亀井廣道氏

 寺川俊昭氏

 菅川良智氏

 長野崇氏

 尾畑文正氏

 真宗大谷派

 キリスト教

 作家・詩人・他



## 戦後75年を過ぎて 非核非戦の思いと願い



安芸南組  
正念寺住職 吉川 洋 氏

「兄さんは、一九四五(昭和二十)年八月六日朝八時頃から、崇徳中学の仲間と広島市上八丁堀で建物疎開の作業中、十五分、飛来したB29を見上げていて原爆の熱線を浴び、皆顔や体を焼かれ、水を求めて牛田の川辺へ辿り着き倒れた」と、一緒にいて生き残られた方から三十余年後に、兄十三歳の悲劇の有様を教えていただいた。

四歳だった私にはその当時の記憶は殆ど無いが、小学生になって、以前から面倒見てもらっていた小母さんに「七日夜に生存の報が入り、八日に救出に駆けつけたが、息絶えていた。どうにか遺体は家に帰ったが、体中真っ黒で、貴男もお姉さんも対面させてもらえなかった」と聞かされ、「お兄さんのことを、お母さんやお父さんに訊いてはいけない」と言い続けられた。

それでも中学生頃には、近所の人々から兄のことを聞くこともあり、原爆慰霊碑にお参りしたり、平和記念資料館にて被爆当時の実情を知るようになった。そして、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませぬから」という碑文のことも。

そして時が経ち、一九七七年の三十三回忌の時、どうしても兄の最後の場所に行きたい気持ちに駆られ、先述の小母さんに頼んで連れていってもらった。

工兵橋という吊橋を渡ってすぐの草むした傾斜地を下った所だった。私は川に降りた。対岸には若い父と子が楽しそうに水遊びをしていた。その姿を背にして、兄の最後の場所に向かい、必死に兄の断末魔の姿を想像して合掌念仏し続けた。そうしていると、兄の声が聞こえたような気がした。否、聞こえた。

「死にたくなかった、家に、帰りたいかった」という。その時、あの碑文のことばが重くのしかかった。予定を変更し、慰霊碑にお参りせずに帰宅した。

あれ以来あの碑文に違和感を感じるようになった。

その後、折りに触れて兄のことばの深意を求めた。そして、“いただいたいのち、死んではいけない、殺してはならない。誰もが心安らかに生きられる世界が欲しい”との願いであり、それはすべての被爆死者の本願なのだろうと気付いた。そして、いのちの本源に帰れとの呼びかけ(帰命)に目覚めることが平和の基本なのだ、と思うようになった。

しかし、その思いで現実を見つめると苦しくなった。

ある時、寺川俊昭先生にそのことを話すと、「あの惨状を目にしたら、ああとしか言いようがなかったのだろう。しかし真宗門徒とすれば、『安らかに眠ってください』ではない。眠るに眠られぬのが被爆者の悲惨な死ではないか。私は『安らかに浄土にお還りください。悲しみを越え、怨みの寂滅する大悲の浄土にお還りください。そして過ちのない道に私たちを導いてください』と言いたい」と答えてくださった。

そのことを受け止め、以来、私なりに非核非戦の思いを訴えてきたつもりである。しかし世の中は変わらない。むしろ、殺された人たちの願いに逆行している。

七十五年経って、漸く核兵器禁止条約が発効となったが、片方では拡散している。又、コロナ感染で世界中の多くの人が苦しめられている。

だからこそ、兄や先生の言葉を胸に、一人でも多くの人と「はちどりのひとしづく」の如くでもいい、念仏往生の歩みを尽し、「ただいま」と兄たちの、待っている家に還りたいと願っている。







浄土真宗本願寺派  
浄寶寺住職 諏訪 義円 氏

私は現在広島市が主催する被爆体験伝承者の一員として、寺前妙子さんという被爆者の方より体験談の伝承を受け、その講話活動を行っています。寺前さんは爆心地近くで被爆され左の目の玉を失うという顔面の大けがを負われました。原爆も戦争も知らない自分が、人様の言語に絶する被爆体験談を語るというのは非常におこがましいことで、講話を終えた後はいつも寺前さんに申し訳ないという気持ちになります。しかし寺前さんご自身は、「口を開かねば始まらない。ともかく二度と繰り返さないために原爆の恐ろしさを一人でも多くの人に伝えて欲しい。」と背中を押して下さいました。その悲痛な願いが、伝承活動を続ける一つの支えとなっています。

そもそも私が伝承者を志すこととなった発端は、現在住持を務める浄寶寺(浄土真宗本願寺派/広島市中区大手町)にあります。浄寶寺は戦中まで、現在でいう広島平和公園の原爆死没者慰霊碑より十数m西にありました。平和公園は元々1300世帯の住む広島有数の繁華街だったのです。爆心地からわずか280m、寺は街諸共に焼き尽くされ一家はみな亡くなっていきました。ただ学童疎開中だった前住職(当時12歳)が唯一生き残ったものの、原爆孤児となり戦後は随分と辛酸を舐めたということです。その経験から前住職は生涯に亘り非核非戦を訴え続けてきました。一昨年85歳で亡くなりましたが、晩年も病身でありながら原爆に関することには力を尽くして協力していた姿が思い起こされます。養子の私が住職を継承するに当り、そんな活動も引き継いで欲しいとは一言も言われませんでした。前住職の生き方に触れ

る内に自然と原爆に向き合う気持ちになっていったように思います。

もう一つ忘れられないことがあります。30年程前に亡くなった実家の祖母も街中で被爆しました。尋ねても原爆のことは殆ど話しませんでした。明治生まれの気丈な性格で弱音を吐くような人ではなかったのに、あまり気に掛けることもありませんでした。

ところが、ある8月6日の朝のこと、私が高校生の頃でした。祖母の部屋から呻き声が聞こえてきます。どうしたんだろう?と心配になり部屋を覗いてみると、テレビ画面に平和記念式典の様子が映し出されており、それを見ながら祖母がボロボロと涙をこぼして嗚咽していたのです。私は衝撃を受けました。祖母は原爆で酷く心を傷つけられていたのです。

被爆体験を『話さなかった』のではなく、『話せなかった』のです。

原爆投下直後、松重美人氏は報道カメラマンの使命として、涙を流しながらシャッターを切り、5枚の写真を後世に残しました。「たとえ数千枚の写真でも原爆の恐ろしさを伝えることは出来ない」伝承活動に当たっては松重氏の言葉が重くのしかかります。しかしながらこの世には決して看過することのできない深い悲しみと切実な叫びがあるのです。それらに少しでも触れた者の責務として伝承活動はあるものと私は考えています。

## 2021年度 広島別院非核非戦法要

7月6日 14:00 開 会 挨拶 広島別院明信院 輪番 中根 慶滋  
15:00 法 話 講師 寺川 大雅氏(芸備組西願寺)  
16:00 閉 会 挨拶 広島別院明信院 責任役員  
16:30 終了予定

広報・情報発信部門からのお知らせとお願い

教区ホームページをご覧ください <http://sanyo-kyoku.jp>

Facebook @sanyokyoku

Twitter @sanyokyoku\_koho

Fax 079-292-1747 (山陽教務所)

E-mail [sanyo@higashihonganji.or.jp](mailto:sanyo@higashihonganji.or.jp)



## 掲示板の法語募集中

- ・各種関係書類がダウンロードできます
- ・教区内での活動情報など、掲載ご希望の方はご連絡ください
- ・ご意見、ご感想、ご要望等、お聞かせください